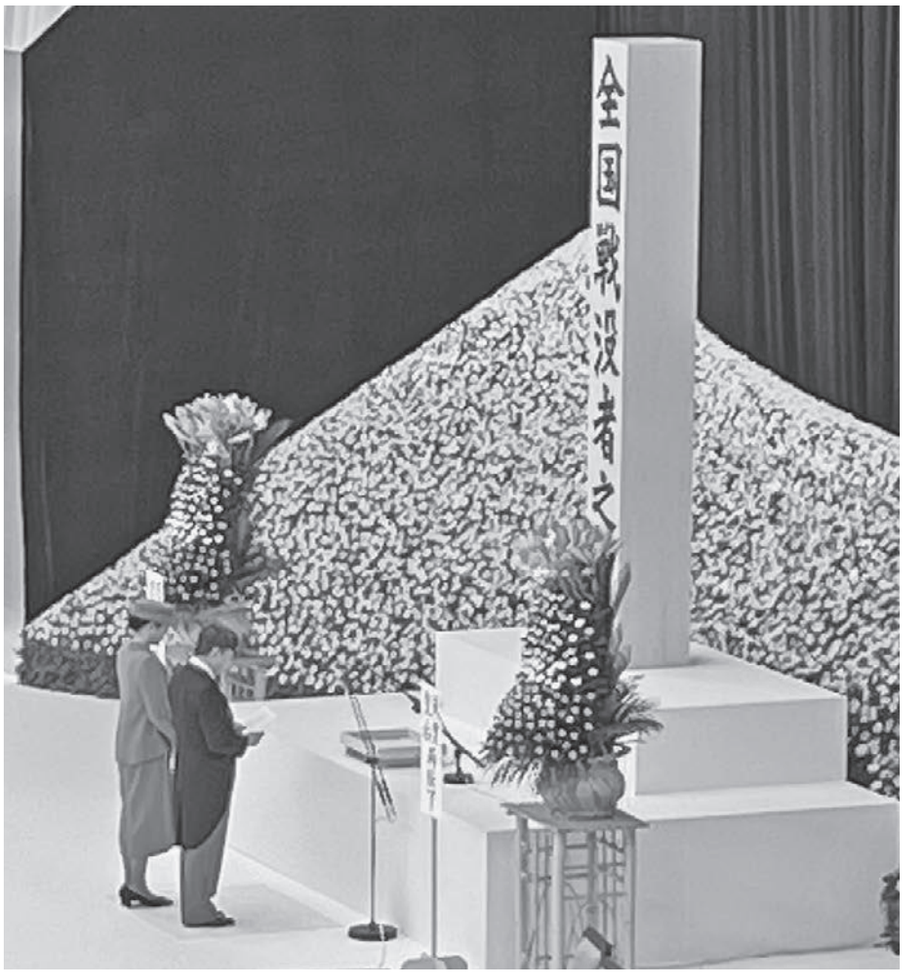
一般財団法人
徳島県遺族会
会報

発行所
徳島市雑賀町
東開21番地１
一般財団法人
徳島県遺族会
TEL(088)636−3212
FAX(088)636−3213
http://izokukai.jp/
発行責任者
坂千代　克彦
印　刷
グランド印刷㈱

令和六年 全国戦没者追悼式



七十九回目の終戦記念日を迎えた八月十五日、政府主催の全国戦没者追悼式が東京都千代田区の日本武道館で挙行された。

追悼式には天皇、皇后両陛下をはじめ、岸田文雄内閣総理大臣、衆参両院議長など各界代表、全国の戦没者遺族、四千人余りが参列した。岸田総理の式辞の後、正午の時報とともに参列者全員で黙祷を捧げた。

天皇陛下のお言葉を賜ったのち、衆参議長、最高裁長官代理（判事）、遺族代表として福島市の安齋満さん（八十六才）が追悼の辞を述べた。

最後に参列者が式壇に献花を行い、本県代表としては、徳島県遺族会の坂千代克彦会長が献花を行った。

天皇陛下おことば

令和六年八月十五日㈭
日本武道館
全国戦没者追悼式

本日、「戦没者を追悼し平和を祈念する日」に当たり、全国戦没者追悼式に臨み、さきの大戦において、かけがえのない命を失った数多くの人々とその遺族を思い、深い悲しみを新たにいたします。

終戦以来七十九年、人々のたゆみない努力により、今日の我が国の平和と繁栄が築き上げられましたが、多くの苦難に満ちた国民の歩みを思うとき、誠に感慨深いものがあります。

これからも、私たち皆で心を合わせ、将来にわたって平和と人々の幸せを希求し続けていくことを心から願います。

ここに、戦後の長きにわたる平和な歳月に思いを致しつつ、過去を顧み、深い反省の上に立って、再び戦争の惨禍が繰り返されぬことを切に願い、戦陣に散り戦禍に倒れた人々に対し、全国民と共に、心から追悼の意を表し、世界の平和と我が国の一層の発展を祈ります。

語り部事業のご案内（2か月に1回、奇数月に開催）

●第96回　11月９日（土）13:30 ～ 14:30　戦没者記念館
「有事の日本で活躍した曽祖父の生涯をたどる」　松本　雄介　氏　（小松島市）　高校３年生
松本様は、「戦死した曽祖父がどんな人生を歩んだのか」ということに興味を持ち、「全国高校生歴史文化フォーラム」で発達障害を乗り越え、徳島県代表として研究した内容を発表されました。今回は、若い世代の視点から「戦前の日本・激動の時代に活躍した曽祖父の人生」を語っていただきます。

●第97回　令和7年１月11日（土）13:30 ～ 14:30　戦没者記念館
「阿南市遺族連合会の取り組み、今、私に出来ること」　武田　光普　氏　（阿南市）
武田様は、県下最年少で阿南市遺族会会長に就任（現在56歳）。阿南市遺族会及び青年部活動に尽力。大叔父が戦没者。曾祖母は地域の国防婦人会長として地域を奔走。しかし、送り出した息子は戦死。生前、曾祖母が私に伝えた言葉とは。

●第98回　令和7年３月８日（土）13:30 ～ 14:30　戦没者記念館
「大伯父の戦歴をたどり、これからの時代の平和を考える」　正治　真紀　氏　（板野郡藍住町）
正治様は、遺族会青年部に入会したことをきっかけに、ビルマで戦死した大伯父のことについて各方面から資料を取り寄せ、その足跡をたどりました。また、親戚縁者との関係が希薄になりがちな現在、「このままでは一族の歴史を知る若い世代が途絶えるのでは」と危機感を持たれています。今回は、これからの時代の平和について、中学生の息子さんと話し合った体験等を語っていただきます。

全国戦没者追悼式
遺族代表　追悼の辞

令和六年八月十五日（木）
日本武道館
全国戦没者追悼式

本日ここに、天皇皇后両陛下のご臨席を仰ぎ、各界代表をはじめ、全国各地から遺族代表が集い、全国戦没者追悼式が厳粛に執り行われるにあたり、戦没者の遺族を代表して、謹んで追悼の言葉を申し上げます。

早いもので、先の大戦が終わりを告げてから七十九年の歳月が流れました。私たち遺族も高齢となり、あの悲惨な戦争の悲劇の記憶も、薄れゆく今日にあって、国のため戦場に赴き、無念にも散華された戦没者の皆様を忘れることはありません。

父は、昭和十八年に私が五歳、弟が一歳、そして、母が二十五歳の時に出征し、その年の十一月に中国で戦病死しました。その後の母の苦労は並大抵のものではなく、ただ、がむしゃらに農作業に働く一方、遺族会活動を通じ、同じ境遇の人々と励ましあいながら、家族を守り抜き九十四歳の天寿を全うしました。ただただ、感謝の言葉しかありません。

今日の平和と繁栄は、戦没者の皆様の尊い犠牲の上に築かれたものであり、国の礎となられたその尊い行いを、多くの国民に知っていただき、感謝の気持ちを寄せていただきたいと思います。

平和の大切さは、私たち遺族が身に染みて知っております。世界では、今なお戦争が絶えることがなく、多くの戦争犠牲者が出ており、一日も早く平和が実現することを祈るばかりです。

私たち遺族は、戦争の悲惨さと平和の大切さを、今こそ、語り継いでいかなければなりません。記憶の薄れゆく今日にあって、教訓を伝えていく機会が失われつつある現在、語り部として、子・孫へと継承していくことが大切であり、遺族の使命でもあります。

本日は、多くのご来賓の参列のもと、かくも厳粛に追悼式を挙行していただき、遺族を代表し心から感謝を申し上げます。

結びに、ご英霊のご冥福とご参列の皆様のご健勝とご多幸を心からお祈りし追悼の言葉といたします。

令和六年八月十五日㈭
全国戦没者遺族代表
安　齋　　満

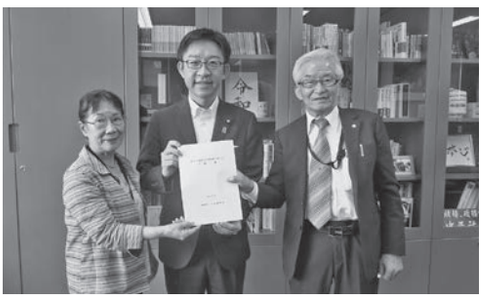
全国戦没者遺族代表者会議の開催
～令和七年度政府予算獲得に向けて～

令和六年七月二十六日（金）参議院議員会館（東京都）において、全国の遺族代表者百三十七名が参集し、全国戦没者遺族代表者会議が開催され、本会からは坂千代会長と濵副会長が参加しました。

また、来賓として武見厚生労働大臣、高市経済安全保障担当大臣をはじめ、多数の自民党国会議員に御臨席いただきました。

大会では、令和七年度政府予算に対する最重点要望項目として、「特別弔慰金の継続・増額」「平和の語り部事業拡充強化」「慰霊友好親善事業・洋上慰霊の実現」を期することが決議されました。

また、大会終了後に本会役員は衆参の議員会館に赴き、県選出国会議員等に陳情活動を行いました。今後も要望事項の実現に向け、全国の遺族会と連携しながら運動を継続して参ります。



第十七回特別企画展
「身近にある戦争～徳島の戦跡から～」を開催

戦後生まれが大多数を占める現在において、戦争の記憶が風化することが懸念されております。

今回の特別企画展は、徳島新聞社が県内の戦跡を写真や動画でまとめた「とくしま戦争デジタルアーカイブ」、県内各地の慰霊塔・忠魂碑の記録などを紹介し、「身近なところに〝物言わぬ語り部〟として戦争の記録は残っている」ということを来場者の皆様にお伝えすることができたと考えております。

開催期間は、夏休み期間と重なる令和六年七月二十七日（土）から八月二十五日（日）で、期間中は約一千二百人の皆様に来館いただき、近年の国際情勢などもあり、戦争に対する関心の高さを感じました。

今回の特別展の開催にあたっては、一般社団法人徳島新聞社様、県内各地区遺族会様の全面的な御協力により、貴重な写真資料等を展示することができました。

関係者の皆様には、深く感謝申し上げる次第であります。

徳島県護国神社例大祭
（移転遷座二十周年記念事業竣工奉告祭）のご案内

護国神社では、左記日程により恒例の例大祭を斎行いたします。

この祭典は、県内各地からご遺族やご来賓の方々のご参列をいただき、わが国の平和の礎となられたご英霊に対して、感謝と慰霊の誠を捧げる大切なお祭りです。

又、今年は移転遷座二十周年記念事業竣工奉告祭を併せて執り行いたく、祭典内において「天水連」による阿波踊りの奉納を予定しておりますので、当日はお誘い合わせの上、是非ご参拝いただきますようご案内申し上げます。

尚、詳細の案内状や玉串料奉納帳などは、各市町村遺族会にご送付させていただいておりますので、宜しくお願いいたします。

日　時　記

令和六年十一月二日（土）
午前十時三十分から正午過ぎまで

※一般参列者用の駐車場は、台数に限りがございますので、なるべく乗り合わせていただくか他の交通機関にてご参拝下さい。

お問合せ
徳島県護国神社社務所
電話　０８８(６６９)３０９０

護国神社移転遷座二十周年記念事業奉賛金について

昨年からお願いしております奉賛金の募財活動については、募集期間が令和六年十二月末日までとなっておりますので、追加のお申込みがございましたら、引き続き受付けさせていただいております。

「徳島県戦没者記念館開館十周年行事」及び「徳島県戦没者遺族大会」が開催される

去る九月十四日（土）、徳島グランヴィリオホテルにおいて、「徳島県戦没者記念館開館十周年行事」及び「令和六年度徳島県戦没者遺族大会」が開催された。当日は、開館十周年行事として、戦没者記念館の開館に御尽力いただいた郷土史家の松下師一氏による講演会を開催した後に、昼食を挟んで「令和六年度徳島県戦没者遺族大会」が開催された。大会には後藤田正純徳島県知事（名誉大会長）、山口俊一衆議院議員、仁木博文衆議院議員、中西祐介参議院議員、水落敏栄日本遺族会会長、重清佳之自民党徳島県連会長、元木章生徳島県議会議長をはじめ、市町村長、各種関係団体の代表などのご来賓、各地区のご遺族、約三百五十名が出席された。

本大会の開催にあたり、坂千代会長は挨拶の中で次のように述べた。

「遺族大会は二年に一度開催されており、今回もこのように盛会裏に開催できたことは会員一同この上もない喜びである。衷心より、感謝をこめて、皆様に厚く御礼を申し上げる。

さて、戦争の事実を次の世代に語り継ぐため、ご遺族のご浄財によって十年前の平成二十六年十月に開館した徳島県戦没者記念館には、現在、八千百九十三柱の英霊のお写真が展示されている。語り部事業は、これまで九十五回開催し、約五千人の方に参加いただいており、日本遺族会においても、令和六年度から平和の語り部事業を全国の遺族会と連携しながら実施している。

このように本会は取組みを進めているが、さらに英霊の顕彰と、戦争の悲惨さ、平和の尊さを次世代に引き継ぐことが重大な使命であろうと考えている。そのためには次代を担う青年部の育成が重要であり、しっかりと引き継げるよう重点的に進める。青年部では、これまで以上に、本会、女性部と連携を図り、取組むことを期待している。

令和七年からの次回特別弔慰金については、その本旨である『国は戦没者を忘れないこと』に鑑み、特別弔慰金が継続・増額されるよう全国の遺族会と足並みを揃え運動を展開する。」

大会では、遺族会への多大な貢献と功労のあった方々として、八名の会員に名誉大会長表彰（知事表彰）、二十名の会員に会長表彰、三名の事務局職員に会長感謝状が贈られた。

また、中学生による第十回平和作文コンクール（徳島県と本会の共催）の優秀作品の表彰が行われた。

本大会において、決議された決議については、後述のとおりである。

※なお、松下師一氏の講演内容は、次号（令和七年一月号）に掲載します。

大会決議

本日ここに令和六年度徳島県戦没者遺族大会を開催し、総力を挙げて次の各項の実現を期する。

一、世界の恒久平和を目指し、戦争の悲惨さ、平和の尊さを次世代に語り継ぐこと。

一、総理、閣僚及び国会議員等の靖國神社参拝の定着をはかること。

一、戦没者遺族に対する処遇は、国家補償の理念に基づき改善すること。

一、戦没者等の遺族に対する特別弔慰金を継続・増額すること。

一、慰霊友好親善事業の充実と遺骨収集の拡充強化をはかること。

一、組織の強化・存続を図るため、青年部の育成を積極的に推進すること。

以上、決議する。

令和六年九月十四日

令和六年度徳島県戦没者遺族大会

名誉大会長表彰

徳島市	坂東清英	
小松島市	赤瀬敏幸	
阿南市	粟飯原富子	
吉野川市	立石フサ子	
名東郡	谷渕孝雄	
海部郡	近藤孝市	
板野郡	七條郁雄	
三好郡	山口博視	

会長表彰

徳島市	戸井田龍行	
鳴門市	三津良裕	
鳴門市	田村嘉啓	
小松島市	清原伸二	
阿南市	神野武重	
阿南市	原　嘉久仁	
吉野川市	市原英俊	
吉野川市	川村治吉	
美馬市	西岡　登	
三好市	下川茂之	
三好市	國田登美子	
勝浦郡	野上治男	
名東郡	森脇昌之	
名西郡	仁木　孝	
那賀郡	西川　豊	
那賀郡	橋村正子	
海部郡	猪谷　功	
板野郡	市山豊子	
板野郡	藤田保明	
美馬郡	森　　稔	

会長感謝状

海部郡	海部孝治	
海部郡	向井田雅史	
板野郡	宮本久美子	

第十回平和作文コンクール

最優秀賞

板野町立板野中学校	二年	住忠芽依

優秀賞

阿波市立市場中学校	二年	笠井玲奈
阿波市立阿波中学校	二年	池上月乃
美馬市立岩倉中学校	二年	岸本美陽

第10回「平和作文コンクール」

最優秀賞「命どう宝」

板野中学校　二年　**住忠　芽依**さん

皆さんは「命どう宝」という言葉をしっていますか。「命どう宝」とは沖縄の言葉で「人の命は何ものにも代えられない大切なもの」という意味があります。

私がこの言葉について考えようと思ったのは、沖縄での修学旅行初日、私たちは糸数壕に入りました。壕の内は真っ暗で、すべりやすく、けがをしやすい場所でとても怖かったです。しかし、戦争が行われていた当時は、ライトもなく人々は苦しみ、ひめゆり学徒隊の方たちは看護にあたっていたり、危ない外での水くみをしていたと思うと心がいたくなりました。でも、この糸数壕では多くの人が亡くなってしまう集団自決が行われていないのです。それは壕の内にいた人たちの「生きたい」、「家族のもとに帰りたい」という思いがあったからだと思いました。糸数壕の次には、ひめゆり平和祈念資料館に行きました。そこでは、亡くなったひめゆり学徒隊の方たちの顔写真があり、全員笑顔でした。それなのに戦争はその笑顔までもうばっていくのだとくやしくなりました。「平和な世界」という言葉は、本当に平和な世界だったらこの言葉をつかわないと思いました。自分たちで戦争が起こらないようにしていきたいと思いました。

沖縄での修学旅行二日目、私たちは、戦争を体験された古謝さんのお話を聞きました。古謝さんのお話で私は、「命どう宝」という言葉を覚えました。古謝さんが戦争中、草やセミを食べていたと聞き、とても衝撃を受けました。そして古謝さんは、

「戦争で人間が人間ではなくなる。」

と言っていました。人間が人間ではなくなるとは、あまり想像がわかなかったのですが、事前学習の映画で日本軍は本当に味方なのかというぐらい、市民に対してとてもひどいことをしていてびっくりしました。戦争を体験された方のお話を聞いて、事前学習よりもっと戦争の怖さが分りました。

私は、沖縄の平和学習で自分にできることはないかを考えました。まずは戦争のことを後世へ語りつぐことだと思いました。今から戦争が行われたのは七十九年前です。だから、戦争を体験された方が少ししかいなくなってしまっています。それは、学習した私たちが語っていけたらと思います。次は、戦争についての知識を得ることです。ある程度知識をもっていたら、新たな疑問や戦争のことについて理解が深まると思います。この沖縄の平和学習で、「命どう宝」という言葉について興味をもち、仲間と意見を交流したり、現地でしか分からないものについて考えることができました。今もウクライナやロシアなどの戦争が世界で起こっています。戦争がはじまったのは人間から、なくしたいと思っているのも人間、すべては人間からはじまっているので、なくすことも人間がしなくてはならないと思いました。皆さんも「命どう宝」という言葉から、戦争を自分たちでなくしていきましょう。

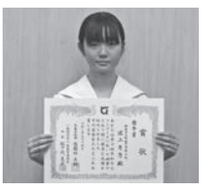
優秀賞
「平和の大切さ」
市場中学校 二年
笠井 玲奈さん

私は中学生になってから戦争についての映画を見たり話を聞くことがありました。私は勉強するまで「自分には関係ないだろう」と思っていました。今思うととてもはずかしいです。五月に私は修学旅行で沖縄に行きました。そこで私は沖縄でしか体験することができない「ガマ」というところに入りました。ガマは暗くて上から水が「ポタポタ」と落ちてきました。最初は服がぬれてしまうなと考えていました。どんどん先に進むと水たまりがあり、すべりかけてしまいました。周りがとても暗いので光がないと何も見えなくて水たまりにも気づけませんでした。クラスの子たちが全員入ったところでガイドさんからの説明がありました。「今ポタポタ落ちて来ている水は戦争中のときはとっても大切で、ケガをした人たちはこの上から落ちてくる水を飲んでいたんですよ。」と聞きました。その話を聞いたとき私は「えっ」とおどろいてしまいました。最初入ったときにぬれてしまうと思っていた水がそんなに大切なものだったのかとおどろきと悲しみでいっぱいでした。

「もっと奥に進みましょう。」と言われガマの一番奥に行きました。そこは全く光が入ってきません。本当に何も見えなくて怖かったです。ガイドさんが「ライトの光を消してください」と言われました。全員が消すと誰一人見えませんでした。「ここにはもう助からないという人がいたんです。誰も助けてくれなくてただここで死を待つしかなかったんです。その人たちは、家族に会いたいと泣いていたそうです。」と聞きました。私はこの言葉が耳からはなれませんでした。悲しくて涙が出ました。「家に帰って家族に会いたい。」そう思いました。生きてる時代が違っただけ。私の家族がもし戦争に行ってしまったらどれだけ会いたくても会えないし、きっと生きれないだろうなと思いました。

ガマ体験で私は戦争がない今がすごく「幸せ」であると分りました。帰る家があって「おかえり」と言ってくれる家族がいる今を大切にしようと思えた体験でした。「戦争は何があっても絶対にしてはいけない」ということをもっとたくさんの人に知ってほしいです。私たちは実際戦争を体験した人の話を直接聞ける最後の世代です。このことをしっかり心に留めて次の世代の人たちにつなげていきたいです。誰も幸せにならない戦争は二度としてはいけません。世界中の人が幸せになることをねがっています。

優秀賞
「『戦争』の跡・沖縄のさけび」
阿波中学校 二年
池上 月乃さん



私は戦争から平和は生まれないと思います。それは、戦争が起き、人々が受けた苦しみや後悔が皆の笑顔や幸せにつながるはずないからです。

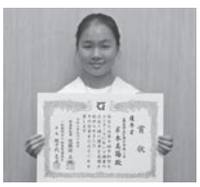
平和学習の中で、「平和とは何か」を共に考えました。私が一番に思い浮かんだのは、友達・家族・大切な人たちのことです。いつも通りの日常を壊し、多くの命を奪う戦争の真実について、多くの世代の人が知り伝えていかなければいけないと思います。残酷な戦争を二度と繰り返さないという強い気持ちをもつために大切なことだと思います。

私が修学旅行で行った沖縄は唯一地上戦が行われた地です。美しいと思っていた場所で七十九年前は戦争が起こっていたということは信じられません。戦場になっていた地へ移動するたび、恐怖と命の尊さを、目、耳、そして肌で感じました。マリンブルーの海を見ながら、体と心がスーッと冷える恐ろしさに震えました。

特に心に残っていることは、ひめゆり学徒隊のこととガマ体験です。ひめゆり学徒隊の生きた跡を追いました。また、ガマでは火炎放射の跡や暗闇の中で起きた話を語り部さんが話してくださいました。私と同じ年の子が戦火の中でいたことが、私は想像さえできませんでした。今、もし戦争がこの場で起きてしまったら、ひめゆり学徒隊の人たちのように、戦場で戦うことができるだろうか。残酷な兵器の前では、人間の命は鳥の羽より軽いのかもしれません。戦争は命の価値まで下げてしまうことが分りました。

ありったけの地獄を詰めたような恐ろしい戦争。私の周りではどんどん風化していっていました。しかし、平和学習や直接追体験したことで私は深く考えることができました。次の世代に、実際に経験した戦争体験を受け継ぎ、伝えていくことが大切だと思います。これから、私は、沖縄で知ったことを忘れず、今の平和に感謝しながら生きていきたいです。

優秀賞
「『命の大切さ』を伝え合う」
岩倉中学校 二年
岸本 美陽さん



私は修学旅行で沖縄に行き、ひめゆり平和祈念資料館を見学しました。ひめゆりの塔でのガマの中は、とても暗く、足場も悪く、とても入れそうにはなかったことを覚えています。そこで実際に私と同じぐらいの年の子が兵隊さんを治療していたと考えると、「すごいな」と思う気持ちと同時に、「とても怖いな」という気持ちになりました。ひめゆり学徒隊の人たちが実際に治療に使われていたメスなどの遺品が展示されているのを見ました。当時より老朽化している影響かも知れませんが、そこに展示されていた治療の道具を見ても、このようなもので手術をするのは怖く、困難なことだったのではと思いました。毎日とても苦しい思いをしながら、当時私と同い年くらいの子が兵隊さんの治療をしていたと想像すると、私なら生きているだけでもつらいと思いました。ひめゆり学徒隊の生存者の方に、当時の状況をお聞きする映像を見ることができました。苦しそうに、時には涙を流しながら語っているのを見て、「沖縄戦はひめゆり学徒隊の人たちや、兵隊さん、そして沖縄の人々にまで大きな影響を与えた決して忘れてはいけない出来事なのだな」と思いました。だからこそ、家族や身の周りの人たちと戦争の悲惨

さや、今回学習したことを話し合ったり、新しく教えてもらったりして、語り継いでいきたいです。そして、私は二度とこのような出来事を起こさないために、これからどのような行動を取ればよいかを考えました。そしてそれは、日頃から家族や友達を大切にし、支え合うことだと考えました。喧嘩をしたり、仲の悪いままでいると、いざというときに誰とも助け合いができない状態になると思うことと、ひめゆり平和祈念資料館での体験で、命の大切さを改めて知ったからです。ひめゆり学徒隊の中でもきっと、協力して治療をしたり、苦しい生活の中励まし合ったり、人と助け合うことはとても大切なことだったのではないでしょうか。それに、ひめゆり学徒隊のみなさんや、兵隊さんたち、そして沖縄の人々も戦争で一度きりの人生を奪われてしまうことは、とてもつらかったのではないでしょうか。まずは、身近な人たちと命の大切さを話し合い、伝え合うことが、平和な社会の実現においてとても大切なのではないかと思いました。

地方だより

令和６年度　市町村戦没者慰霊祭・追悼式の開催（６月２７日～７月３１日まで）

令和６年度の戦没者慰霊祭・追悼式が各地域において執り行われ、当日は県遺族会役員が参列しました。

美波町戦没者追悼式：６月27日

阿南市戦没者追悼式：６月29日

海陽町戦没者追悼式：６月30日

上勝町戦没者追悼式：７月31日

百歳のお慶び

大磯　タツコさん（板野町）

令和６年８月27日に大磯タツコ様（板野町）が百歳を迎えられました。

徳島県遺族会会長からお祝状と記念品、板野町遺族会からはお祝い金をお贈りしました。現在は町内の施設に入所されており、施設のみなさまに優しく見守れながら元気に過ごされております。入所前は、お肉が大好きでお嫁さんが作ってくれたお料理は美味しく召し上がっていました。また、友達と温泉へ行ったり、お喋りが大好きで社交性があり明るくてみんなから慕われておりました。

いつまでもお元気で過ごされますよう、心よりお祈り申し上げます。

板野町遺族会会長　東條　昭二

語り部事業講演要旨

●第94回語り部事業　７月13日（土）

「大空に憧れ、大空に散った」

海部郡海陽町　**井花　昭文** 氏（79）

本日は、「大空に憧れ　大空に散った」と題し、私の兄、井花敏男についてお話しいたします。

「花の都の靖國神社、春の梢に咲いて逢おう」という有名な軍歌の一節がありますが、先の戦争では、多くの若き命が失われ、靖國神社に祀られており、私の兄もその一人です。

靖國神社は、明治2年6月29日、明治天皇の思し召しによって建てられた招魂社が始まりで、国家のために尊い命を捧げられた人々の御魂を慰め、その事績を永く後世に伝えることを目的に創建された御社です。

この招魂社が今日の靖國神社の前身であり、明治12年6月4日、社号が「靖國神社」と改められました。

あどけなさの残る、この写真の少年が私の兄、陸軍少尉　井花敏男です。

兄は、昭和3年2月4日に生まれ、少年飛行兵15期で太刀洗航空学校甘木生徒隊に入隊、そして昭和20年4月16日、降魔特別攻撃隊の一員として沖縄本島の北方において散華、17歳2か月という若さで戦死いたしました。

兄が生まれたのは、現海陽町宍喰の奥にある猪ノ鼻という山間の小さな集落で、尋常高等小学校の頃から、大空に憧れを持ち続けていました。

「大きくなったら飛行機乗りになりたい」、子供のころからそんな夢を抱いていた兄は、陸軍少年飛行兵の採用試験を受け、合格通知を受け取った兄は、飛び上がって喜んだと母から聞いております。

昭和18年の秋、15歳の兄は太刀洗飛行学校の甘木生徒隊に入隊、朝鮮半島の京城や中国大陸において、搭乗員としての技量を磨いたそうです。

兄が入隊した当時、陸海軍の飛行兵は少年たちにとって憧れの的であり、志願者が多く、競争倍率は六十倍を遥かに超えていたそうです。

受験資格は、入校年の3月31日における年齢が15歳以上17歳未満、学力が尋常小学校卒業程度だったそうです。

従前は、陸軍少年飛行兵学校において、一年間の基礎教育の後に操縦に特化した専門技術教育が行われていましたが、少飛14期から試験の成績優秀者などを速成教育する制度を導入し、基礎教育を省略して専門教育を行ったそうです。

昭和19年7月28日に太刀洗航空学校を卒業した兄は、満州龍江省での訓練時代に操縦教官であった舟橋少尉に実の弟のように可愛がってもらったそうです。

少尉からいただいた手紙には「知覧へ出発する前夜、敏男君と枕を並べて寝ました。敏男君の幼い寝顔を見ていたら、涙が止まりませんでした。」と書かれていたそうです。

少尉も昭和20年5月28日、隊長として自分が教えた搭乗員12名と万世陸軍飛行場から出撃、沖縄周辺において米艦船に突入し散華されました。

搭乗員は、「必死必中」の信念のもと、毎日くたくたになるまで特攻のための訓練を行いましたが、何の楽しみもなかった若い彼らにとって「塩味の効いた握り飯」をほおばりながら談笑することが、唯一の楽しみだったのかも知れません。

これは、出撃4日前に家族に宛てた兄からの手紙です。５枚目の便箋には「自分が死んでも、絶対泣かぬよう、国のために死ぬのです。写真を十種余り取って有ります。満州で舟橋少尉殿が送ってくれます。操縦記章も送ります。」と書かいてあり、６枚目には、「郷土の皆様によろしく、ご無沙汰をくれぐれも謝ってください。阿州男子がやります」と書かれていました。

勇ましい文面の中にも、家族や集落の人たちを気遣う兄らしい優しさが読み取れます。

兄は、機体に250キロ爆弾一発を抱き、知覧から沖縄までの片道650キロメートル、約2時間半を移動したのです。

この時、兄は何を思って飛んだのでしょうか。今となっては聞くすべもありません。

空に、海に、幾多の若い命が消えました。兄が戦死したあとも特攻は続き、特攻での戦没者数は、陸軍1,417名、海軍2,531名の合計3,948名で、その多くが若者でした。

朝出撃した彼らは、昼には英霊となって戻ってきます。

これが戦争、いや特攻隊員の悲しい現実だったのかも知れません。

兄が戦死して約一か月後に、母の元へ兄の戦死が知らされました。白木の小箱が一個、中には紙切れ一枚が入っておりました。そのとき母は、その場で泣き崩れたそうです。

兄が生きていれば現在96歳です。もし、戦争がなければ、兄はどのような人生を送っていたのだろう。せめてひと目、兄に会いたい。

叶わぬ願いですが、こうして写真をながめると日の丸の前で軍刀を携え、大人に負けまいと懸命に背伸びしようとしている兄の姿が私の瞼に浮かんできます。

特攻とは、爆弾を抱いた戦闘機で敵の艦船に体当たりするという戦法で、搭乗員が死ぬことを前提とした悲惨きわまるものです。

本格的な特攻作戦は昭和20年4月から陸海軍共同で行われ、終戦ひと月前の7月19日まで続きました。

この沖縄特攻作戦には、九州各地や台湾、沖縄諸島から多くの搭乗員が出撃しており、知覧からは陸軍の特攻戦死者1,036名のうち最も多い439名が出撃したと記録が残っています。

知覧から出撃し散っていった搭乗員の年齢は17歳から32歳、平均年齢は約22歳、みんな青春真っただ中でした。

昭和20年2月、兄は特別攻撃隊を志願し、第108振武隊、第7降魔隊に選抜されました。その時の兄のノートには、「父上様、長らくお世話になりました。敏男もこの度、特攻隊員としての参加を許されました。喜んで敵に体当たりをします。どうか弟達を自分の様、飛行兵としてください。隣の皆様にもよろしく。二度とお目にかかれまいと思います。ではお元気で」と書かれていました。

故郷宍喰の土を二度と踏むことも叶わず、また、親兄弟にも会えぬまま、大空に散華した兄の胸の内はいかばかりであったのかと思います。

兄は、知覧に進出して4日目となる4月16日の6時、司令部で水盃を交わしました。

飛行場は満開の桜、そして午前6時50分、

真鍋隊長の「何も言うことなし、しっかりついてこい」の一言とともに隊員達と目礼を交わし、愛機に駆け寄り11機編隊の3番機として出撃しました。

部隊は午前9時30分から10時にかけ、沖縄諸島・伊平屋島の北北東20海里において急降下し、米軍レーダー監視駆逐艦に次々と体当たりを敢行、全員散華いたしました。

兄はこの時17歳と2か月、あまりにも短い生涯でありました。

あれから月日は流れ、戦争を知っている方も少なくなってきました。

戦争や特攻は過去のものとしてとらわれがちですが、自分の命と引換に、この国を護った多くの若者がいたことを、私達は絶対に忘れてはなりません。

「子や孫、そしてこれからの日本を背負って立つ若い人たちに、二度と彼らと同じ人生を歩ませないためにも、彼らのことを後世に伝えていくことが大切ではないでしょうか」

大空に憧れ、大空で散った兄のこと、知覧から飛び立った多くの若者たちがいたこと、そして、平和・命の尊さを、一人でも多くの方に伝えていくことを御誓い申し上げ、私の話を終わらせていただきます。

インターンシップ大学生が記念館で学ぶ

戦没者記念館では、令和六年八月十九日（月）に徳島新聞社で就業体験（インターンシップ）を行っている大学生十名を受け入れました。

学生達はマスコミへの就職（新聞などの記者）を目指す県外の大学三年生で、館の紹介ビデオを鑑賞後、英霊の御写真・戦没者の遺品・パネル等を視察しました。その後、参集殿に移動し「遺族会の概要」「記念館の建設経緯」などの説明を受け、「戦没者記念館が開館した直後」という設定で、事務局職員を相手に模擬取材を行いました。

参加した学生達は、記念館に初めて訪れたということで、模擬取材を通して、先の大戦の史実や、当時の徳島の状況、残された遺族の思い等の学習をしていたと思います。

今後も記念館においては、「戦争の悲惨さ」「平和の尊さ」を次世代に語り継ぐため、若い世代に対する平和学習の場の提供に努めて参ります。

勝浦町立生比奈小学校が校外学習で記念館来館

勝浦町立生比奈小学校の六年生の児童と先生の総勢十九名が、九月十九日（木）に平和学習の一環として徳島県戦没者記念館に来館しました。

始めに、濵県女性部長が「きくさんの沖縄戦」の紙芝居の上演と体験談を語りました。濵部長の熱のこもったお話は臨場感にあふれ、子ども達は真剣な眼差しで観覧していました。

その後、記念館の見学を行い、約八千二百名という英霊の遺影の多さと、地元勝浦町にも戦没者が数多くいることを知り、驚きを隠せない表情でした。また、パネルや遺品などを見て質問したり、メモを取ったりと熱心に見学していました。

今回の来館により、「平和の尊さ」と「命の大切さ」について、考えるきっかけにしていただければ幸いです。

戦没者記念館だより　— 写真展示数　8,194 柱　（R6.9.20 現在）—

▶ 来館者のお声

- 徳島新聞「鳴潮」を読み、またテレビで戦争の悲惨さを痛感し、記憶にとどめていかなければならないという思いで来館しました。語り継ぐことの大切さも感じています。一人でも多くの方々が来て見て少しでも平和の尊さを感じてもらえることを念じています。（60代・女性）
- 祖父が徳島大学の学生であった時代が戦争の終戦前でした。
  祖父は20年前に亡くなりましたが、祖父のことを知りたくて来ました。本当に大事な記念館です。ありがとうございました。（40代・男性）
- 資料館があるとういう大切さを改めて感じました。英霊の方々に報いる、恥じない生き方をしていきます。（40代・女性）
- 遺影を見て戦没者数が数字でなく、一人一人の人生があったということが分かりました。また白木の箱が展示してあり、ご両親がどんな思いで受け取ったかと思うと、胸が締め付けられます。（40代・男性）
- 中学校からのお便りを見て初めて来館しました。祖父は戦争に行ってはいませんが兵隊として終戦を迎えたと聞いております。存命の頃にもっと話を聞いていれば良かったと改めて思いました。（40代・女性）

「洋上慰霊（令和七年度実施予定）」の御案内

日本遺族会では、平成三年度から政府の補助金等を受け、「戦没者遺児による慰霊友好親善事業」を実施してきましたが、同事業は令和七年度で終了することになっております。

そこで、終戦八十年並びに本事業実施三十五周年を迎える令和七年度は、「洋上慰霊」を実施することが予定されています。

洋上慰霊は、船舶の借上げ費用が高額であることから過去二回【本事業二十周年（平成二十二年度）、終戦七十周年（平成二十七年度）】しか実施していないため、参加できなかった遺族からも「今一度実施してほしい」との要望が多くあったことから計画されたものです。

計画概要は次のとおりですので、参加を希望される方は事務局まで御連絡ください。

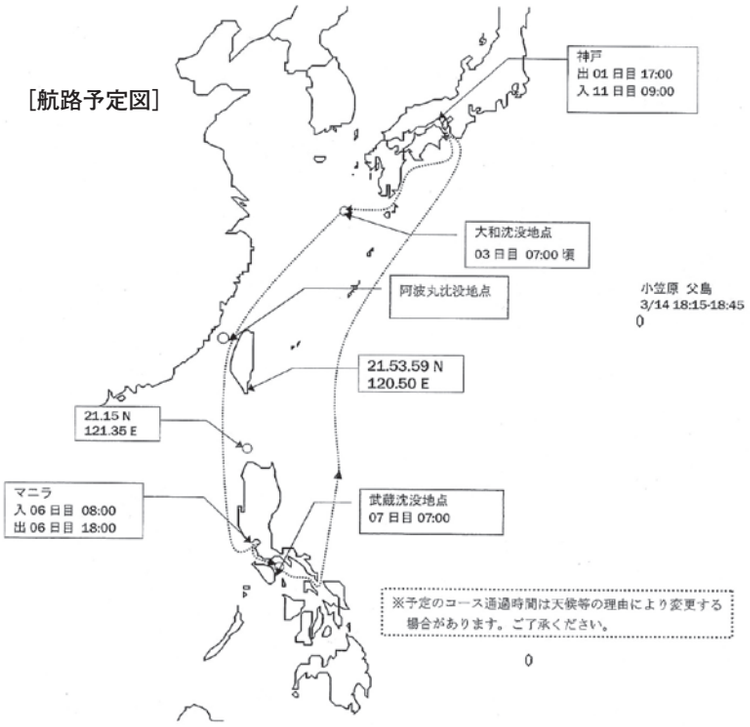
※現段階において、この事業は実施予定であり、厚生労働省の補助金交付団体に選定（令和七年三月頃）されてから正式決定となります。

洋上慰霊日程（案）

日次	月　日	発着地等	スケジュール
1日目	6月1日(日)	神戸（日本）	午後：受付後、船内へ 結団式及び渡航手続き説明会 17時頃出港予定
2日目	6月2日(月)	終日航海	午前：講演 水落会長 ①午後：九州沖洋上慰霊祭
3日目	6月3日(火)	終日航海	②午前：東シナ海洋上慰霊祭 午後：講演 平和の語り部
4日目	6月4日(水)	終日航海	③午前：台湾海峡洋上慰霊祭 午後：講演 平和の語り部、事例等
5日目	6月5日(木)	終日航海	④午前：台湾・バシー海峡洋上慰霊祭 ⑤午後：ルソン島西方沖洋上慰霊祭
6日目	6月6日(金)	午前 マニラ 入 夕刻 マニラ 出	午前：マニラ入港：９時頃 全戦没者追悼式 午後：懇親会：友好親善（船内にて）
7日目	6月7日(土)	終日航海	⑥午前：シブヤン海洋上慰霊祭 午後：講演 水落会長
8日目	6月8日(日)	終日航海	⑦午前：レイテ島東方沖洋上慰霊祭 午後：講演 語り部座談会
9日目	6月9日(月)	終日航海	⑧午前：太平洋沖洋上慰霊祭 午後：講演 語り部：実演
10日目	6月10日(火)	終日航海	⑨午前：南薩諸島沖洋上慰霊 午後：入国説明会、講演 船長 夕刻：解団式：懇親会
11日目	6月11日(水)	神戸（日本）	９時頃入港予定、下船

※日程（案）は後日、内容を変更する場合があります。

[航路予定図]



◎ 実施計画の概要

1　参加資格

父等を海域で亡くされた戦没者の遺児で前年度の本事業に参加していない者。（ただし、前年度参加者であっても付添者で青年部が同行する場合は参加を認める。また、実施地域は洋上以外にフィリピン諸島を含んでおり、定員に満たない場合は同地域の関係者や過去の参加者を認める場合がある）なお、申込多数の場合は選考となる。

2　参加費

・十万円（但し、燃料費高騰などで値上げする場合がある）

※過去に同事業に参加された方は、協力金を別途いただく

3　実施時期・期間

・令和七年六月一日（日）～六月十一日（水）

・十一日間　※詳細は、洋上慰霊日程（案）のとおり

4　運航航路等

・【航路予定図】のとおり

5　募集人員

・各支部　原則七名程度　計　約三百名

※各支部参加者の中から世話人（一名）を推薦

6　集合場所及び解散場所

・集合、解散の場所は、兵庫県神戸市の予定

・集合、解散の場所までの交通機関等の手配は各自で行う

7　申込締切日

・令和七年一月末日

8　問合せ・お申込み

・徳島県遺族会事務局まで

TEL０８８－６３６－３２１２

徳島県遺族会 青年部メンバー募集

戦没者とその時代を学び、平和について一緒に考えましょう

徳島県遺族会は、先の大戦で最愛の肉親を失った悲しみを乗り越え、悲惨な戦争を繰り返さないことを固く誓い、昭和２６年(１９５１年)の創立以来、一貫して平和を求めて活動を続けています。

今後も史実を語り継ぎ、平和な日常を求めていくため、戦没者の孫・ひ孫の世代を中心に「青年部」を発足しています。さらに活動の輪を拡げていくため、メンバーを募集します。

直接のご遺族でなくても参加可能です！！

青年部員の声

- 戦死した祖父の戦跡を始めて知りました。どんなに辛い気持ちで亡くなったのかと思います。祖父のお陰で今の自分たちがいられると感謝の気持ちで一杯です。（40 代女性）
- 戦争は絶対に起こしてはならないと改めて思います。一度始まると終わらせるのは難しい。子どもたちに伝えて行きたいと思います。（40 代男性）

青年部への登録方法

※登録は無料です。随時、各種行事の案内が届きます。

※参加してみたい行事や活動に無理のない範囲で気軽にご参加ください。

※右記のＱＲコードを読み取っていただくと、ホームページで概要がわかります。

活動内容

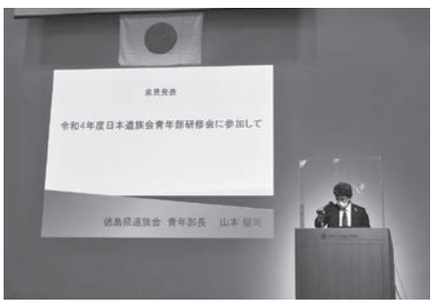
※全国戦没者追悼式、沖縄「徳島の塔」慰霊祭への参画、参列

※語り部事業、小中学生への平和学習、研修会への参加

※他県遺族会との交流会、徳島県護国神社祭事（例大祭）への参列など

全国戦没者追悼式

沖縄「徳島の塔」慰霊祭



県遺族会研修会

お問合せは、お気軽に徳島県遺族会事務局まで　　☎ 088-636-3212

「春の靖國神社参拝団・千羽づる奉納旅行」の実施について

今年度も春の靖國神社参拝団を募集します。

昨年までは、１泊２日でしたが、今回は「千羽づる奉納」や「草津温泉でのんびり宿泊」等のコースを加え、２泊３日の行程を予定しております。

多数のご参加をお待ちしております。

１　実施予定日

令和７年３月25日（火）～27日（木）

２　主な行先

靖國神社正式参拝、東京都戦没者霊苑・群馬県護国神社（千羽づる奉納）、世界遺産富岡製糸場、草津温泉　など

３　旅行代金

１１万円程度

４　募集人員

４０名（最少催行人員25名）

５　募集締切

令和７年１月下旬

６．行程（予定）

日時	月日(曜)	行程
1	3/25（火）	出発 徳島空港 9:00 ―JAL454→ 羽田空港 10:10/10:45 ― 靖国神社（昇殿参拝・昼食）11:30 13:50（記念撮影後、ご参拝） ― 東京都戦没者霊苑 14:10 15:10（千羽づる奉納） ― 東京のさくらの名所を車窓よりご見学 ― 上野公園、隅田川沿い、千鳥ヶ淵、皇居外苑など ― ホテル着（懇親会・泊）17:00頃 ◎宿泊施設：「KKRホテル東京」 〒100-0004　東京都千代田区大手町1-4-1 TEL：03-3287-2921
2	3/26（水）	出発 ホテル 8:30 ― 一ツ橋IC ― 休憩 高坂SA 9:35/9:50 ― 藤岡IC ― 群馬県護国神社 10:40 11:40（千羽づる奉納） ― 富岡市内（昼食）12:15 13:00 ・・・ 世界遺産・富岡製糸場（専門の解説員がご案内）13:10 14:30 ― 伝統的な湯もみショーと、町のシンボル湯畑を ― 草津温泉 熱の湯＆湯畑ご散策 16:15 17:15 ― 草津温泉（泊）17:20 ◎宿泊施設：「喜びの宿　高松」 〒377-1711　群馬県吾妻郡草津町草津312 TEL：0279-88-3011
3	3/27（木）	出発 ホテル 8:30 ― 旧軽井沢銀座 9:40 10:40（お洒落な店が並ぶ街をお楽しみください） ― おぎの屋横川店 11:10 12:00（名物「峠の釜めし」のご昼食） ― 松井田妙義IC ― 休憩 新倉PA 13:30/13:45 ― 羽田空港 14:40/15:35 ―JAL461→ 徳島空港 16:50

注１）上記の行程は、事情により内容を変更する場合があります。
注２）最終の旅行代金・行程等は、11月下旬までに御案内します。

遺族会の動き

令和六年七月～九月実施行事

（七月）

1日　英霊にこたえる会総会（護国神社）
13日　正副会長会・平和の語り部推進委員会（護国神社）
13日　語り部事業（戦没者記念館）
13日　青年部研修会（戦没者記念館）
25日　日遺女性部幹事会（九段会館テラス）
26日　全国戦没者遺族代表者会議（参議院議員会館ほか）
27日～8月25日　特別企画展（戦没者記念館）

（八月）

3日～4日　みたま祭り（護国神社）
4日　英霊にこたえる会街宣活動（各地）
14日～15日　全国戦没者追悼式（日本武道館）
15日　平和祈念祭（護国神社）
22日　女性部役員会（護国神社）

（九月）

1日　青年部役員会（護国神社）
6日　正副会長会・平和の語り部推進委員会（護国神社）
14日　徳島県戦没者記念館開館10周年行事・「語り部事業」（グランヴィリオホテル）
14日　令和6年度徳島県戦没者遺族大会（グランヴィリオホテル）
28日　神恩感謝祭（護国神社）

令和六年十月～十二月行事予定

（十月）

6日～7日　日遺中国四国ブロック会議（高知市）

（十一月）

2日　例大祭（護国神社）
9日　正副会長会、記念館企画運営委員会（護国神社）
9日　語り部事業（戦没者記念館）
13日～14日　英霊にこたえる会中国四国ブロック会議（山口市）
23日～24日　沖縄「徳島の塔」慰霊巡拝（糸満市ほか）

（十二月）

10日　全国戦没者遺族大会（自民党本部ほか）
11日～12日　日遺女性部結成七十周年記念行事（九段会館テラス）
21日　青年部「平和の語り部研修会」（ザ・グランドパレス）

本会の会報は、年４回（１月・４月・７月・10月）に発行します。

会報の次回発行は、令和7年1月号です